

尊たの方ほうから下くださるのである。自力じりきで作つくる世話せわやめて、貫もらふばかり頂いただきくばかり、本ほん願がん名な號ごう信しん受じゆしてとあるからは、眞まう受じゆけに頂いただきいて見みなさい。三はい杯はい酢すをねぶつたら、酸すくなつて甘あまくなつてと、思おもひを作つくりにかゝることはいらぬ。思おもふ思おもはぬの世話せわいらすに、酢すい甘あまい鹽しほ辛からい三あぢつの味あぢが知しれる。夫それが三はい杯はい酢すの味あぢの知しれたのであ
る。罪つみはいかほごふかくとも、われを一しん心しんにたのまん衆しゆじやう生じやうをば、かならずすくふ
べしとの、本ほん願がん名な號ごうの御お意ごが、後ご生じやう大だい事じの腹はら底ぞこへ、頂いただきかれて見みれば、たのまねば
ならぬなら、たのみます、たのむことはいらぬなら、やめておくといふやうなこ
とではない。たのむ思おもひより外ほかはないのである。

たのむ
さたす
へたす

八 「歸き命みやうとは本ほん願がん招せう喚くわんの勅ちく命めいなり」。歸き命みやうとは衆しゆじやう生じやうの彌み陀だ如にょ來らいにむかひたてま
つりて、後ご生じやうたすけたまへと、たのみたてまつるこゝろなり」とあるからは本ほん願がん
の勅ちく命めいが、行ぎやう者じやの心こころへひゞき渡わたつた一念ねんが、たのむ思おもひである。法ほふに約やくすれば、
我われに歸き命みやうせよ、機きに約やくすれば、助たすけたまへとたのむ行ぎやう者じや歸き命みやうの一しん心しんである。喚よび人にん

も歸命、喚ばれ人も歸命、谷の響は峯の呼聲、彌陀は十劫曉天より喚通しなれども、行者の宿善淺くして、歸命の一念が起らなんだが、今は宿因深厚の深き谷底へ我をたのまん衆生をば、必ずすくふの勅命の、響き顯れた處が、助けたまへの一念である。たのむものを助くるの勅命と、助けたまへとたのむ心と、二つの様なれど、體は別物ではない。本願の白道即ち信心の白道、信ずることゝろも、念ずることゝろも、彌陀如來の御方便より、おこさしむるものなり。疑ひ深い我々が、疑ひなく慮りなく、助けたまへとたのむ一念は、昨日や今日の出來事ではない、十劫正覺の曉天より、響流十方の大音聲で、休む間もなく御喚詰め、一度は届けにや措かぬの御念方に、追ひ詰められて、仰せに順ふ一念は、二義の三義のど、たのみごころには世話のやける様なことではない。至心信樂己が心の詮議忘れて、御助けに預かる一念が、たすけたまへのたのみ心であります。たのまねば助からぬと云ふことなら、いやなことなれど、たのみますといふやうなことではな

い。我身をふりかへつて見れば、十惡五逆の徒もの極重惡人無他方便とて、諸佛菩薩が、總掛りに掛つて下されても、助かる手がかり更にない、必墮無間の大罪人。今度の後生はいかゞいたさうと、相談かける處は更にない、臨終今端と成つたなら、産んで貰ふた親でさへ行先の相談には間に合はぬ。産んで育てた息子や娘が枕の元で泣いて呉れても、いよく出掛けて行く時は、泣く人を冥土の伴にや連れられず、生ながらへて居る内こそ、親があるで子があるでと、互に力になり合ひなられ合ひして居るけれど、一つの息の切れる時は、ちりぐくばらぐく、連れても行けず、連れられもせず、積み貯へた金銀財寶も、冥途の路用に持つては行けず、善根功德の用意はなし、飛んで火に入る夏の虫、自業自得の道理にて、墮ちねばならぬ此身をば、彼方の方から先手をかけて、助ける彌陀は十劫以來、待ち兼ねて居るほどに、罪はいかほごふかくとも、其まゝながら我をたのため、必ずすくふの御勅命が聞えたら、これがまあごうして、聞かぬふりして居られませ

うぞ、これがまあどうして御受けせずに居られませうぞ、これがまあどうして、
順はずに居られませうぞ、これがまあどうして、任さずに居られませうぞ、よろ
こびく御助けにあづかる一念が阿彌陀如來にひとふりむきにふりむいた、助け
たまへの一念である。これを歸命の一念といふ。この信心が頂かれて見ると、た
のめの仰せがなければよからうと、小言いふたがおはづかしい。不足に思ふたが
勿體ない。ようこそたのめとよんで下されました、たのめの仰がなかつたなら、
萬劫たつても見向きもせずに、冥より冥に入り、苦より苦に入り、迷ひに迷ひを
重ねて、浮む瀬はあるまいに、我をたのめと、喚んで下されたればこそと、小言
處ではない、たのめの御意が有がたく頂かれるであらう。

第四席 聞信喜

聞其名
辨と聞

一 引き續いて願成就の文の御意を御取り次ぎ致すにつき、一つ不審を立て、聽

聞もんに入いれませう。其その不ふ審しんとは、前ぜん席せきで辯べんじた通とほり、聞もん其その名な號ごうの聞もんの字じを、「信しん卷まき」
 に、「しかるに聞もんといふは、衆しゆ生じやう佛ぶつ願がんの生しやう起き本ほん末まつをきゝて疑ぎ心しんあることなし、こ
 れを聞もんといふなり」と、仰あふせられてある。經きやう文もんに其その名な號ごうを聞きくとあるのに、佛ぶつ願がん
 の生しやう起き本ほん末まつを聞きくと、仰あふせられたはいかゞぞと申まをすに、これは十方はう恒ごう沙じやの諸しよ佛ぶつ如によ
 來らいが、阿あ彌み陀だ如によ來らいの名な號ごうを、讚さん嘆だんしたまふときは、たゞ南な無む阿あ彌み陀だ佛ぶつ、南な無む阿あ彌み
 陀だ佛ぶつと、稱せうへたまふのではない。彌み陀だの本ほん願がんの、生しやう起き本ほん末まつを説ごき述のべて、讚さん嘆だんし
 たまふのである。其その諸しよ佛ぶつの讚さん嘆だんの仕し振ぶりが知しりたくば、此この大だい無む量りやう壽じゆ經きやうが、釋しや迦か如によ
 來らいの讚さん嘆だんである。此この釋しや迦かの讚さん嘆だんと諸しよ佛ぶつの讚さん嘆だんと、違ちがふ筈はずはない故ゆゑ、諸しよ佛ぶつの讚さん嘆だん
 も、此この大だい經きやうの如ごとく、無む量りやう壽じゆ佛ぶつの威ゐ神じん功く徳とくを讚さん嘆だんしたまふより外ほかはない。然しかるに此この
 大だい經きやうを讀よんで見みれば、佛ぶつ願がんの生しやう起き本ほん末まつを説ごかせられたものである。
 生しやう起きといふは、生しやう起き次じ第だいというて、初はじめに本ほんがあつて、夫それについで末すゑが起おこり、
 又また夫それが本ほんとなつて、末すゑが起おこり、夫それについで起おこりするを、生しやう起きといふ。拔はつ諸しよ生じ死じ勤こん

苦之本の、大慈大悲が本となつて、五劫思惟の本願が起り、其本願が本となつて、兆載永劫が起り、因位の願行より、報身報土が成就し、正覺成就が本となりて、悲智の二門を以て、普く衆生を攝化して、報土に往生令めたまふことを、次第々々に説きたまへるを生起といふ。

本末とは、一本の木で喩へるならば、根は本なり、枝葉花實は末なり、法藏因位の發願修行が本となつて、今日果上の阿彌陀如來の、自在神力を以て、衆生を濟度したまふが末なり。法藏因位の願行の本があればこそ、今日果上の光明名號で助けたまふ、末がある。そこでこの大無量壽經は、其彌陀の本願の本より、今日果上の、衆生濟度まで、本末始終を、説かせられたもの故、此大無量壽經を聽聞するのが、佛願の生起本末を聞くのである。如來の本願を説くを、經の宗致とするとは、此ことである。

本願と名號と

二 時に大經一部の講釋でも聞かねばなりません、左様ではない、大

は同じもの

經一部は第十八願を、開説したまひし經なれば約めて見れば第十八願に收まる故、第十八願を聞けば大經一部を聴聞したことになる。其第十八願の出來上つたのが、南無阿彌陀佛の六字故、佛の名號を以て經の體とすと、御意あらせられて、六字の名號に收まる。されば朝な夕なの、善知識の御化導より、本願名號の御謂を聴聞するのが、即ち彌陀如來の他力本願の御謂を聴聞するのである。夫が諸佛讚嘆の名號で、即ち佛願の生起本末を聞くのである。大經一部の講釋を聞いて、文々句々の譯は知つても本願名號を信せずば、聞いたとは申されぬ。假令文々句々は知らずとも本願名號の御謂が聞き得られ、一念の信心を決定せられたならば、夫が佛願の生起本末を聞いて、疑心あることなき、如實の聞である。

三 成就の御文は十句四十字あれども、聞の一字が肝要である。抑成就の文は名號の謂を説き給ふより外はない。信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼國は南無の二字の謂、即得往生、住不退轉は阿彌陀佛四字の謂である。是が名號の徳

願成就
六字

であつて此徳このとくを行ま者が受取うけとるは、聞きより外ほかはない。故ゆゑに名號みやがうの謂いはんを聞開き、ひらいた相またが即まち信心しんじん歡喜くわんぎ等ごうである。

願成就
の大要

四 成就じぢゆうの文もんを豎たてに文相もんさうを別わけると四段だんになる。即まち聞其名號もんこみやがうと、信心しんじん歡喜くわんぎ乃至ないし

一念ねんと、至心ししん回向わう願生げんじやう彼國ひこくと、即得そくとく往生わうじやう住不退轉じふたいてんとこの四段だんとなるのである。此

四段だんを體たいに約やくして横よこに並ならべて見みると、四段だんながら皆同時みなどうじである。同時どうじとは、只聞ただき

く一念ねんであつて、聞きく一念ねんに此四段このだんが攝おさり、名號みやがうを聞きき開ひらく一念ねんが、即まち信心しんじん歡

喜ぎで、即まち至心ししん回向わう願生げんじやう彼國ひこくで、即得そくとく往生わうじやう住不退轉じふたいてんである。然しかれば文もんに約やくして申まを

せば、四段だんなれども、行者ぎやうじやへ獲得えつとくする時は、唯是ただこれ聞きく一つである。是これが第十八の

願意ねんいで、其佛本願力こぶつほんねんりき、聞名欲往生もんみやうよくわうじやう、皆悉到彼國かいしつたうひこく、自致不退轉じちふたいてんとも、其有得聞ごうとくもん、彼

佛名號ぶつみやうがう、歡喜踊躍くわんぎゆやくないし乃至ないし一念ねん、當知此人たうちしにん、爲得大利みさくだいり、則是具足そくぜぐそく、無上功德むじやうくどくと、釋迦しやくか

如來にょらいは聞もんの一字ひとで第十八の願意ねんいを顯あはし給たまふのである。是これで第十八願だいいちじゅうはちねんを煩惱具足ほんなうぐそくの

凡夫ぼんぶが信受奉行しんじゆぶぎやうするは、此聞このもんの一つひとより起おこると云いふことが知しれる。故ゆゑに第十八願だいいちじゅうはちねん

意を顯す所には必ず聞の字を説き給ふのである。

五 此成就の文、十句四十字あれ共、聞其名號信心歡喜の二句を至極とす、此二句を約めて見れば、聞信喜の三となる。喜は信より起る、信は聞より得る。喜は信に攝り、信は聞に攝る。依つて覺如上人は「經釋ともに聞をもて詮要とせられたり。よく聞くところにて往生の信樂を獲得する條文にありて顯然なり」と仰せられてある。

聖道門は智慧を磨いて自ら證を開く、淨土眞宗は聞いて信するのである。先づ此聞といふは、この世界は耳根正徹と申して、耳より聞くを最勝とする、佛は六根通説なれど、此世界に意を十分知らしむるには、口音陳唱とて、音聲で説いて聞かせるを最上といたすのである。別して阿彌陀如來の佛心を凡夫に授けたまふは、親心のありだけを名號に封じこめて、夫を聞かせて、耳から心へ届ける様に仕組ませられてある。依つて三誓の偈文には、我至成佛道、名聲超十方、究竟靡